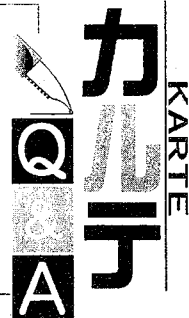


国内の患者数が約200万人とされる「慢性副鼻腔炎」は、鼻づまりや鼻水、嗅覚障害、頭痛などが長引き、日常生活にさまざまな影響を及ぼすのが特徴だ。症状や治療法について専門医に聞いた。



慢性副鼻腔炎

慢性副鼻腔炎は、風邪などが原因で発症した急性副鼻腔炎が慢性化して生じることが多く、副鼻腔炎の症状が2〜3カ月以上続いた場合に診断されます。

主な症状は鼻づまり、粘り気のある鼻水、においが分かりにくい（嗅覚障害）、鼻水

は、大きく2種類あります。一つはいわゆる「蓄膿症」で、膿性の鼻水や鼻づまり、頭痛が多く、頬の空洞で起きがちです。

もう一つは「好酸球性副鼻腔炎」で、嗅覚障害が強いのが特徴です。鼻の付け根や目の奥の空洞で起きやすく、

（抗菌効果よりも免疫機能を活性化させ炎症を抑える作用を期待）や、去痰薬、ステロイド点鼻薬などを用います。また、アレルギー性鼻炎がある場合、アレルギー性鼻炎が原因で長引きやすいため、抗ヒスタミン薬なども用います。

生理食塩水での鼻洗浄やネブライザー治療なども併せて行

薬物療法で改善なければ手術も

が喉に落ちる（後鼻漏）などです。炎症が長引くと、鼻腔の粘膜が腫れたり、鼻茸（鼻ポリープ）ができたりして鼻の通りが悪くなり、鼻腔内の換気障害が生じてさらに炎症を悪化させるという悪循環が起こります。

鼻茸を伴う慢性副鼻腔炎に

気管支喘息やアスピリン不耐症などの合併が多くみられます。難治性で国の難病に指定されています。

慢性副鼻腔炎の治療は主に薬物療法と手術療法があります。

薬物療法では、マクロライド系抗生物質の少量長期投与

います。

薬物療法で改善しなければ、鼻茸を取り除くなどの内視鏡手術を検討します。特に好酸球性副鼻腔炎は抗生物質が効きづらく、ステロイドの長期内服を避けるためにも比較的早期に手術が勧められますが、再発しやすく、鼻茸を

小さくする生物学的製剤を使用することもあります。

慢性副鼻腔炎は、適切な診断と治療で日常生活への影響を最小限に抑えられます。早めの受診をお勧めします。

（兵庫県医師会、西尾健志Ⅱ
神戸市東灘区、西尾耳鼻咽喉科院長）

◇第1、3、4日曜に掲載
します。